

## 長野県コミュニティスクール検討会 発言要旨

**日 時** 令和6年5月7日(火) 午後3時～午後5時

**場 所** オンライン開催

**出席者** 上沼 昭彦、河西 哲也、塩原 雅由、城村 義人、傳田 智子、早坂 淳  
伴 美佐子、堀田 茂樹

### 1 開会

○市村課長

ただ今から、第3回コミュニティスクール検討会を開会いたします。4月1日付けで生涯学習課長を拝命しました市村由紀子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。進行を担当させていただきます。

検討会メンバーの皆様方におかれましては、ご多用の中、ご参加いただきましてありがとうございます。本日はよろしくお願いいたします。

この検討会は、5回程度実施することを予定しておりまして、今回は第3回目ということになっております。

第1回の会議では、「学校運営参画とは」という根本的な問いから広くご意見をいただきました。第2回では、「なぜ学校運営参画なのか、学校運営参画は必要なのか」ということについて子ども、学校、地域、行政の視点からご意見をいただきました。

これまでの意見交換を通じて、「学校運営参画の意義」について、本会議内では認識共有を図れたものと考えております。今後は学校現場の皆様との間で「学校運営参画の意義」を共通認識としていくために、WHAT（何を）、HOW（どうしていくか）についてご検討いただく予定となっております。今回もそれぞれのお立場から忌憚のないご意見をいただきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

では、ここから検討事項に入っていきます。ここからの進行は早坂座長様よろしくお願いいたします。

### 2 協議

○早坂氏

改めましてこんにちは。座長を仰せつかっております長野大学の早坂でございます。あっという間にこの検討会議も第3回を迎えるに至りました。1月に第1回、3月に第2回、そしてこの5月に第3回の議論となってまいりました。これまで皆様には非常に熱い議論を交わしていただき、多様な立場からそれぞれが気づき合う、というような時間を過ごさせていただいたというのが私の感想でございます。本日もいつもと変わらない積極的なご発言、議論をお願いできればと思っております。全部で5回の会議が予定されておりますので、今日はちょうど折り返し地点と

言えるのかなと思います。これまで学校運営参画について、一体それは何なのか、どういう意義があるのか、なぜなかなかうまくいかないのか、それぞれの立場からご意見をいただいたところでもございました。本日も引き続きこれまでの議論を踏まえたところで、皆様からご意見をいただけたらと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

冒頭に事務局よりこれまでの議論を振り返っての説明をお願いします。

## ○事務局説明

第2回では、なぜ学校運営参画が必要なのか、検討会の皆様からご意見をいただきました。

まず、コアな価値観（教育観）の部分では2つ。1つ目は子どもの育ち、学びを支えるのは保護者や学校ばかりでなく、子どもの周りにいる多様な他者であること、2つ目は多様な他者との交流、関わりが子どものウェルビーイングに繋がるといったご意見をいただきました。つまり、これからは「子どもをよってたかって育てる社会」へ変化していくことが必要ではないかというご示唆をいただきました。そのような社会では、教師の役割は「ティーチャー」から社会と子どもたちを繋げる「繋げ人（コーディネーター）」へ、地域住民の役割としましては、これまで以上に子どもたちの育ちに責任を持って関わることや、子どもと大人が互恵的に学び合う存在へと変化していき、変化のためにはコーディネーターや公民館活動が必要であるといったご意見をいただきました。先程の教師の役割が変化していくためには、学校長のビジョン、そして、教職員のパラダイムシフト（意識の変革）が必要なのではないかといただいたところではあります。

このような「子どもたちをよってたかって育てる社会」への変化をもたらすための装置としてコミュニティスクールが有効であることが示唆されたところです。また、そのためには、考え方の共有により不安感、負担感の解消へ。そして、3年はかかる見通しで気長にやっていくことが必要なのだといったご意見もいただきました。

しかし、学校関係者への研修会や学校訪問などでは以下のようなご意見をいただくことがよくあります。「学校を開くことは重要」というご意見はありますが、地域の方々にどこまで入ってきてもらい、どこまで一緒に考えていくのか。学校は地域の方々にWelcomeとしたいが、できない現状もあるのではないかと。とにかくやってみる」というご意見もあるが、はじめの一步が踏み出せない、地域の方々に学校の支援に入ってもらっているだけではだめなのか、というご意見もあります。

第1回、第2回でも河西校長先生や堀田教頭先生からご意見をいただいている「これから先が見えないことに対する不安感」や「新たなことが増えるのではないかと」といった負担感」は現場の皆さんからよくお聞きするところです。また、学校運営参画の良さ（意義）がそもそもよく分からないといったご意見も多数いただくところです。

また、地域に目を移しますと、地域のコーディネーターの皆様やボランティアの皆様向けの研修会でも以下のようなご意見をいただきます。「コーディネーターが重要」でも、「コーディネ

一ターの担い手が地域にいない」。育てていくといっても時間がかかってしまい、現状、新しいコーディネーターを見つけることが難しい。子どもの育ちに責任を持っていくことが望まれています。これから一緒にやっていきたいと思います。ということと呼び掛けてはいるのですが、「学校のことは学校で」「私たちはお手伝い」といった根強いイメージがまだあります。地域学校協働活動を支援しているだけではだめなのか、といったご意見もいただきます。

学校運営参画の意義を伝え、参画を充実していくためには、現状多数の課題がありそうです。

そこで、今回は学校運営参画の充実を実現させる上で、現場で課題となっていることは何なのか。こちらをまず明確にさせていただきたい。関係者である子ども、学校長・教頭といった管理職、教職員、ボランティア、コーディネーターといったそれぞれの立場での課題についてご意見をいただきたいと思います。

課題感を整理することで今後、どう対応していくことが必要なのかが見えてくると考えております。それぞれ関わりになっていらっしゃる場面を思い出していただきながらご意見をいただければと思います。事務局説明は以上とさせていただきます。

#### ○早坂氏

コミュニティスクールについては、説明にあったとおりその重要性について誰もが口を揃えて「一緒にやっていくことは大事だ」、「学校と地域、それ以外の人材が、みんなでよってたかった子どもを育てていくことは大事だ」と言葉ではそのように言うのですが、実際に踏み込んでいこうとすると、学校側はどこまで地域の人に踏み込んでもらえればいいのか、今支援をいただいている関係性で留まっていたらいけないのかという思いが、様々な場所から聞こえてきます。また、同様に地域の側に視点を移しても、「学校と一緒に子育てをしていくことが大事だ」と皆さん口を揃えておっしゃいます。だけれども、「お手伝いしていただければいいだろう」と学校から求められて、「じゃあやろうか」と言って腰を上げて学校に入っていく。この「頼まれてやるというお手伝いの関係で十分ではないか」、「これ以上自分たちがもっと主体的にやらなければならない理由が分からない」という地域の方の声もたくさん聞こえてきます。

本日は、これを一歩進めて学校運営参画、地域と学校と一緒に活動をやるだけでも非常に意味があるのですが、一緒に教育を考えていくということ、一緒に地域の子どもを育てていくということ、学校の運営にも地域の人が入っていくということ、これが充実していくためには私たちはどんな課題を乗り越えていかなければならないのか。子ども、学校、地域、それぞれの立場でどんな課題を乗り越えていかなければいけないのか。皆様がそれぞれの立場で乗り越えなければいけない課題について出していただければありがたいと考えています。学校運営参画を充実させるための課題について何かございますか。

#### ○城村氏

いつも有意義な学びの場、ありがとうございます。学校や学校を取り巻く環境をどうするのかということで、様々な組織やチームが組まれています。可視化が進んでいないような気がしま

す。もう少し言うと、学校の中では先生方あるいは関係する人々、地域の方々が関わってくださっていますが、その議論や目指すべき方向性がそこに住んでいる地域の方々あるいは保護者も含めてですが、しっかり伝わっているのか、可視化されているのかなというところが一つの課題感である気がします。そのあたりの情報に触れる量が多ければ多いほど、やはり学校に対しての帰属意識であったり、思いであったり、あるいは自分事として関わりやすいのかなと思います。まず、一点目とすると学校の中で行われた様々な議論、方向性、ビジョンというものがよりふさわしい形で可視化されていくことが大事なのかなと考えています。

○早坂氏

城村さんのお言葉、とても大事なことだと思いますので繰り返させていただきますと、今の学校は何が行われているのか。どこの誰と誰が繋がって、何をやって、何を目指しているのかが個別の活動の中に閉じてしまっているのかもしれないですね。例えば、子どもの登下校の見守りや花壇などの環境整備など、どれも学校にとっては大切な支援ですが、これらがもっとネットワークや情報共有できるような関係性が出来ていくと、より自分事化が進むというお話だったかと思います。自分事化するには情報の共有化、これは本当に心から賛同するところです。どんな形、どんな仕組みがあれば、このような情報が共有化されるかということについてはまた、皆さんから広くご意見いただけたらと思うところです。まず一つは、学校運営協議会、学校運営委員会の中での情報の共有が一つ求められていくのかと思います。

○伴氏

長くコミュニティスクールに関わってきましたが、確かにこの十年くらい学校はすごくオープンになってガラス張り化はしていると思います。しかし、とても性能の良いガラスに守られているので、中でしている活動、子どもたちの声が聞こえてこない。それから匂いがしてこない。五感に訴えるような。学校の中ではすごく様々な素敵な取組があるのにそれが届いてないのかなと思います。ガラス張りというのは学校だよりを地域に回覧していただいたり、例えば校長先生が公民館の会議や民生児童委員会議で学校の様子を話してくださるのですが、やはり特定の人にしか届かない情報であったりするので、もっともっと多様な人が直に関わることで、口伝えで広がっていく学校の良さとか、子どもたちを育てていこうという決意表明だったり広がっていくと良いなと願っています。

○早坂氏

学校は、どうやらガラス張りにはなってきているというところでは。ガラスなので外からは何となく様子は見えるけれども、子どもの息遣いや匂い、子どもの声を直に五感で受け取るタイミングがなかなか無いのかもしれないというところでしょうか。直に関わるということが大事という言葉に伴さんからいただきましたが、より多くの方々の情報共有を超えて、その場を一緒に過ごすとか、活動に参加したり、あるいはその活動を一緒に作っていくというプロセスにより多くの人に関わっていく必要があるということですね。伴さんは「ガラス張り」に对照する言葉で、「網戸張り」という言い方をされますよね。匂いも声も全部外に届いていると。逆に地域の声も

匂いも学校の中に入っていくけど虫は入ってこないという。ここが学校の子どもの安全安心というところですか。どうしても地域との連携協働の議論では、「不審者が入ってきたらどうするんだ」と飛躍した議論に飛んでしまう。もちろん大事な論点なので考えなければならないところですが、安全安心ももちろん大事。そこも守りながら更に一步、一緒にできることを踏み越えていく、協働に一步進んでいくというところが大事ということですかね。

今、保護者・PTAのお立場、またコミュニティスクールに長く関わられているコーディネーターの立場というところでご意見をいただきましたが、この辺りを踏まえていかがでしょうか。

○傳田氏

この議論はとても大切だと思うところで、あえて踏み込ませていただきますが、私自身も少し教員をさせていただいていたこともあるので、その立ち位置でも考えています。情報共有というのは本当に素晴らしいことですし、発信して多くの人の意見を聞くということは正論だと思うのですが、それ自体は非常にエネルギーが必要なことです。様々な人が関わるにあたって、意見を聞いたからには何らかの形でアウトプットしていくことは、先生方、学校の役目になり、とても大きなエネルギーが必要になります。そこに子どもたちと向き合うエネルギーが割かれていくことは、本来の目指すべき姿とはまた違うかなと思うところもあります。だからこそ、コーディネーター的な役割が必要になってくるという議論になると思います。

○早坂氏

情報共有、連絡調整、多くの人を巻き込むことにかかるコストの話です。時間的、労力的な負担感と言い換えてもいいかもしれませんが、私たちが地域と学校と共にやっというとき、多くの人に関われば関わるほど当然様々な負担感は上乘せされていくことは間違いないのかなと思います。学校の中だけで閉じてやった方が、コミュニケーションや意思疎通、合意形成のプロセスも非常にクリアだったりするのですが、様々な利害や価値観をもった地域の方が同時に学校と関わっていく時に、コーディネートしていくことにエネルギーが割かれて、子どもと向き合う時間やエネルギーが無くなってしまっは本末転倒ではないか、こういったご意見も実は非常によく聞かれるポイントだと思うのです。この課題について論点を固定したところで皆さんのご意見を聞きたいと思います。この負担感をどうやったら乗り越えられるのか。よく負担感を充実感で上書きしていくという言い方がされます。要は、「コストはかかっているのは当然だ」と、「人と関わるのだから」。しかし、それがもたらす教育的な効果を見ると、充実感の方が増すという言い方もよく聞きます。ただ、その考え方は今、学校現場の皆さんが本当に忙しくなってしまった要因の一つであるようにも感じています。これも大事、あれも大事、これも絶対大事と教育に取り組んでいった結果、様々なハンドルしきれないような荷物や責任を学校が負っているとしたら、この問題をどう考えたらいいのだろうというのは考えておくべきポイントなのかなと思います。いかがでしょうか。この情報共有等にかかるコストをどうやって乗り越えたらいいのか、あるいはここはもう感受するしかないのか。ここについて何かご意見を持っていらっしゃる方いらっしゃいますか。

## ○城村氏

これはPTAの今の課題感とほぼ同じです。そもそも先ほど私から情報共有と話したのは、先生方に全てやってもらおうとは全く思っていないのです。傳田さんがおっしゃったように地域に適切なコーディネーターの方がいた方がいい、配置された方がいいと思いますし、もっと皆がそこに参加された方がいいだろうなと思います。ただ、課題が何かというと、PTAの集まりなどでいつも話をさせていただくのですが、私は安心して休める組織が大事だと思っています。安心してずぼらをかませることが大事だと思うのです。

例えばコロナ禍を経てPTAがどれだけ課題感を指摘されてるかというと、今まで「10」あった仕事を、大変だから「5」にしようと言うんですが、「5」にしたから楽になるかというとそんなことはないのです。「5」を100%やりなさいと言われると、この負担感は変わらない。つまり、どれだけ安心してその組織に出来る範囲で関わられるかということが大事だと思っています。

どうしても学校は平等、公平というところがあり、先ほど話があったように地域から声があればきちんとそこにフィードバックしなければいけないというところがあると思いますが、私はちょっと出来なくてもいいのではないかと考えています。それが全て学校の責任だとすると、もしかしたら難しいのかもしれませんが、地域にそういったコーディネーターの方が関わりながら、去年出来たけど今年出来ないことがあっていいと思いますし、今年出来なかった事は来年また熱量が増して出来ることもあるかもしれない。ちょっといい加減なことを言っているように聞こえたら申し訳ないのですが、その時その時の地域の人材の熱量は違うと思っていて、それを毎年同じだけのものを同じようにやっていくということを目指すのもうちょっとやめた方がいいのかなと思っています。その地域、その年々、その時々集まった人達の思いで、出来るところを精一杯やっていくことが、地域づくりとして学校の教育を作っていく意味で一つ大切なところなのかなと個人的に考えているところです。

## ○早坂氏

PTAも同じ課題を抱えていて、その中でより発展的にこの負担感の問題を克服しようとされてきた城村さんだからこそ、非常に説得力のある発言だったと思いました。

安心して休めるというのはとてもいいキーワードだと思いますね。よくこの地域学校協働活動や学校参画の議論も、「出来る人が、出来る時に、出来ることを」ということが標語になったりもします。あとは同じことを繰り返す必要もないのではないかとすることも。人も違うし、年によっては地域の課題も変わってきます。また人が抱えている熱量も変わるし、あらゆるものが不動でないときに、同じ活動を繰り返すことはむしろ負担感の方が大きくなりやすいのかもしれないです。

## ○伴氏

情報共有という点で城村さんとは、切り口を変えてお話をさせてもらおうと、今、関わっている上田市立北小学校では、学校から情報共有をメール配信で一斉にお出しすることができるようになっていきます。学校が困っていること、例えば、遠足と一緒にってもらえる人の募集や、研究

授業の間の自習の見守りに関わってくれる人の募集などフレキシブルに学校の一斉メールシステムを上手に使って配信をしています。

それから、ボランティア同士もラインのグループが出来ていて、「こんな大人の学びの集まりをするから、友達を誘い合わせてこの日に、こんなことしない？」というような、アナログからテクノロジーを使って学校の仕事を楽にしていけるようなシステムの上で、情報共有が楽になるようなことを考えています。

情報共有という点ではまた少し切り口が違うのですが、私、実は「りんどうハートながの」という長野県の性暴力被害者支援センターの相談員をしています。様々な被害にあった人達の相談に乗ったり、警察と繋いだりという仕事をさせてもらっていますが、往々にしてこじれるのは、その被害が学校の中で問題が起きた時に、学校の中で解決しようとして長い間学校の中で閉じてしまうことです。もっとプロフェッショナルと情報共有を上手に図って、そこから先はプロに委ねるとか、学校がそういうことを変えていってくださるともっとスムーズに、もっと早く、もっと被害に遭った人達を支援できるのではないかなと感じることがとても多く、情報の共有化もいろんな切り口があると思いますが、そういうことを考えていけたらいいなと思っています。

○早坂氏

まず、よく言われるのはDX化ですよ。アナログのコミュニケーションがこの世界まだまだ多いので大事ですし、アナログでないと伝わらないものもありますが、もっと効率化できる場所も同時にあります。

効率化という点をもう少し考えることで負担感が減らせるのではないかなというのを一個目の論点だったかなと思います。もう一つはあらゆることを学校で抱えるということの難しさ、多くの人と力を合わせて頼るべきは頼るということが学校に出来たら、いろいろと被害者も傷が浅いうちに対処してもらうこともあるかもしれないということですね。

学校現場の先生たちに参加していただいているので、負担感について正直なところを教えていただけると。言葉を選ぶことが難しいかなと思いますが、やはり大変といえば大変ですよ。地域の方との連絡調整、コミュニケーション、情報の共有化、いくらDX化が進んでもどうしても対面になるときの難しさというのは、堀田さん、河西さんはどのように受け止めて、どう前向きな方向にそれをしようとされているのか、いかがでしょうか。

○河西氏

前にもお話しましたが、持続可能な取り組みをするためのポイントとして「無理をしない」という言葉を使わせていただいたのですが、学校も地域も無理をして何か新しいものを作り出して、回していかなければいけないというシステムにすると、恐らくうまくいかないだろうと思います。既にあるシステムの歯車を噛み合わせるという意識を持つことが重要かなと。地域と子どもたちの必要感を重ねるとい言葉で表現している中に含まれているのですが、そうすると、負担感というのは結構軽減されるような気がします。

○早坂氏

地域と子どもたちの必要感を重ねる、既にある歯車をうまく噛み合わせてあげる方向にエネルギーを使っていく、新しく何かを作り出すというよりはうまく回ってなかったものを回るようにしていく。この発想は私の中では今まで抜け落ちていたポイントかなと思いました。何か新しいことを、せつかくだから面白いことをやらなければいけないと思いがちでした。少しハツとしていくところですが、無理をしない歯車の噛み合わせ。確かに、今まで全くうまく噛み合っていないがゆえに、もったいなかった歯車は地域や学校にもかなりあるのでしょうか、きっと。これをうまく噛み合わせていくと、負担感より充実感が増えていくという感じになりそうですかね。

○堀田氏

開かれた学校にしなければいけないというのはどこの学校も共通理解として取り組んでいるところ。学校評価のアンケートを取ると、学校方針や目標が家庭に伝わっているかという評価はかなり厳しい評価になります。それをよく考えてみると、今の議論にあったようにどうやって伝えたらいいのか、どうやって分かってもらえばいいのか、伝達手段が難しいと思います。

例えば、家庭学習のことがよく議論されるのですが、学校ではこんな取り組みをしたいということで議論して取り組み始めたとします。しかし、その取組は家庭の方に分かってもらえない、こんなことをやっているけれど、学校は何もしてくれないと言われてしまうことがある。家庭学習の一例ですが、これを何とかしたいと、「こんなことをやっていますよ」ともっと地域に知らせたいという思いは学校もたくさん持っていますが、どうやって伝えたらいいのか難しいところがあり、一生懸命学校便りや学級通信、懇談会や校長講和でも話したりしていますが、伝わる方には伝わっても、なかなか全体に広まっていけないという非常に難しさがあるなと思っています。

前任の小学校ではコミュニティスクールから発信して、うまく乗って広がっていき学校評価が一気に上がったので、発信がうまくできれば地域の方にも分かってもらえる、協力してもらえるということは確かなのです。良い例は前の学校で出来たと思っているので、更にどうやって地域に広めていったらいいのか良い知恵があったら是非教えていただきたいなと思います。

○早坂氏

この伝え方の難しさ。手段の難しさ。うまく伝わることで、いろいろと拓けていくこともあれば、どう伝えてもなかなか届いていかないというもどかしさを感じることもあります。この難しさは人間のコミュニケーションの本質の議論のようなところもあるかもしれません。やっぱり誰かに何かを伝えることはとても難しいですし、一生懸命伝えても伝わらないことばかりで、本当にやきもきすることもあります。これについて、塩原さん、学校現場に長くいらっしゃって、今は教育委員会のお立場から学校をサポートされている中で、学校と地域とのコミュニケーションのポイント、コツというか、どのように言語化できるのか、いかがでしょうか。

○塩原氏

大変難しい問題だと思います。今いくつか出てきている問題を解決していくために、まず最初に変わらなければならないのが学校。校長先生、教頭先生、教育の最前線で活躍されている先生方、その教育の仕方についていろいろ変えなければならないことが多いと思います。前回、働き

方改革に関わる問題を解決しない限り、学校は一步も前進できないのだとお話させていただきましたけれども、まず校長先生の立場から、最前線で活躍されている先生の立場から、これから学校はどのように変わっていったらいいのかというビジョンを持っていただくことが大事だと。そのハードルさえクリアできれば、必要な情報が、必要なだけ、地域の方々に、保護者の方々に伝わっていくと思います。教育委員会としてはやはり学校も学校教育の問題を解決していくために、的確な問いをきちんと持ってそれを学校や地域の方々と共有していくことが大事だと思います。まずは学校が変わることが大事だと私は思います。

○早坂氏

教育委員会として、変わらなければならない学校をどのような形で支援していくのか。学校の改革のビジョンを校長が持つためには教育委員会はどんな伴走ができるのか。その点についても一歩踏み込んでご発言いただいてもいいですか。

○塩原氏

まず、学校や地域、社会、地域住民の方々と共有すべき問いを、大町市を例に二つ紹介させていただきたいと思います。一つ目は「教員の専門性や学校の役割を再定義できるか」です。二つ目は、「学校や地域の関係を編み直せるか」です。大町市は少子化の問題を抱えています。少子化に対応して、地域の教育は地域でデザインするという考えのもとに、教育改革を進めています。その時に、最初に紹介した二つの問いを発信してまいりました。特に、先ほど私の発言の中で、指導の最前線で活躍されている先生方が変わらなければいけないというように申し上げましたが、先生方の専門性をどうやって、どういう形で再定義していくかということが非常に大事なかと考えています。河西先生はこのことについてどのようにお考えですか。

○河西氏

本日事務局から配布されている資料に、教師の役割は「繋げる役割」だと。伝授者ではなく。よく言われてはいることではありますが、確かにそうだと感じます。授業そのものも子ども同士が関わり合うためには教師が回答を隠し持っていて、それを探り合うような授業ではダメだと言われていて、教師は何か正しいことを知っていて教え込むという感覚ではダメなんだろう。子ども達が問いを持ってそれを追求するためにどんな支援ができるのか、それを考えるのが自分達の役割なんだ、その中に子ども達同士を繋げる、子ども達と他の先生、子ども達と地域を繋げる、社会を繋げるとか、そういうことのために我々は何が出来るのかを考えていく、そういう教師になることが回答かなと考えます。

○塩原氏

学校のスクールリーダーとしての校長先生が、今の河西先生のようなお考えだと恐らく学校と地域の協働というのはそれほど難しい問題ではないなと思います。

私が教師の専門性というものを再定義しようとした時に、一つは学校の中での先生方の協働。その協働をコーディネートするコーディネート。それから、もう一つは学校と地域の専門機関、また地域にいらっしゃる専門家の方々とどう繋がっていくか、繋げていくかという専門性が必要

ではないかなということですが、先ほどの河西先生のお話にもありましたので、私は大変安心したのですが、多くの校長先生が学校の先生方に求める専門性をそのように考えて、学校づくりが行われていれば、この検討会のテーマであるコミュニティスクールというのは当たり前のように出来上がっていくのだろうなと思っています。

○早坂氏

学校が変わらなければならないとして、その校長が学校改革のビジョンを明確に持って、それを教育委員会としてはどうサポートしていくのかという問いを2つ目に出させていただきましたが、教員の専門性の再定義が必要だというところでキラーパスが今度は河西さんの方に回っていったという流れになりました。すごくはっとさせられた、光が当たっていなかったところに光が当たったというような、これまで私たちが当たり前のように捉えていた教員の仕事や専門性、あるいはもう少し広くとらえると学びのあり方そのものが今、問われ直されているのだと、この捉え直しはいろんな人が捉え直していかなければいけない。学校もそうだし、地域の人、保護者も、行政も。全ての人間が学びの捉え直しをしていかなければならないのですが、まずは学校が変わるとというのが、塩原さんのお答えだったのかなと。

変わろうとする学校を教育委員会としては、この問いを持つ形でサポートをしていく。時々このように校長先生に「学校の学びの再定義とは何か」「教員に求められる再定義とは何か」と問いかけるのかもしれない。

今の学習指導要領の文脈では、あるいは令和の日本型学校教育の文脈に載せ直すと、学びの再定義といわば、例えば知識、スキル技能の単なる伝達、習得だけではなく、まずは子どもに合わせて個別最適にやっていきましょう、もう一つはそれぞれの個性あふれる子どもたちを学校の中で学級の中で、学年の中で、あるいは学年を超えて、場合によっては学校を飛び越えて多様な人たちと繋げて協働させましょうという、これが大きな二つの柱かなと。学びのあり方は、受けとる受動的だった学びから、自ら問いを作って探求していく積極的な学びに転換していくのだと、いろいろところで号令は確かによく聞きます。こういった形を一番早く実現させる手っ取り早い方法は、恐らく塩原さんが言われたように、まずは教員が個別最適な形で働けていなければダメで、教員が自分の違いを生かして教員同士で連携協働していないとダメだし、更に言えば、地域の人と教員が連携協働している姿を子どもたちに見せることが出来ればそんなベストな教科書は無いわけですね。子どもたちに協働させるのではなく、子どもたちに探求させるのではなく、まずは教員が目の前で探求している姿を子どもたちに見せてやる、恐らく教員同士の協働というところで塩原さんが意図されたことはそういうことだったのかなと、自分なりに解釈したところでした。

だからこそ、学校が変わらなければいけないし、学校が変わるという姿を子どもに見せなければいけないし、地域の人にも理解してもらわなければいけない。そういった流れになっていくのかなと理解をまとめさせていただきました。

このように考えていくと、今、地域、保護者、そして学校現場、教育委員会とくると、公民館の役割というところも、長野で言うと注目したいとポイントの一つになってくるのかなと思います。上沼さんに、このタイミングでお考えをお聞かせいただけたらと思うのですが、学校でもない、家庭でもない、公民館というお立場で、多様な他者の情報の共有や伝達といったところの難しさをどう乗り越えていったらいいのか、ここにこそ負担感があるんだという傳田さんからの問いから始まった一連の議論ですが、その負担感を軽減させる何か機能であったりとか、やれそうなこと、あるいはその負担感を公民館としてどう捉えていращやるのか、その辺りについてお考えを聞かせていただけたらと思いますがいかがでしょうか。

○上沼氏

情報の共有・伝達の負担感というところですが、飯田市もコミュニティスクールを導入した後、「コミュニティスクールの活動がなかなか多くの人に伝わっていない」と、「実際どのような活動をしているのか地域の中でも知らない人が多い」というような課題は地域の中でありました。コミュニティスクールと言っても、子ども達を対象にどんな活動を地域で支えているのか、公民館報を通じて広く発信したり、学校の方とも話をして学級通信や学校便りのようなところで広く伝えていこうという取組をしてきました。特にそのことについて公民館側で負担感のようなところは議論になっていません。

学校の教育活動を支える立場、また、地域において子どもたちを地域全体で育てていく地域の立場として、今の課題はそのような活動を支える担い手を地域で育てることがやはりとても大事になってくるため、そのような意味でコミュニティスクールとは、どんなことを目的に何をしているのかを、保護者だけでなく地域の方によりしっかりと知っていただき、自分事として捉えてもらいたい、そういった取組が重要になってくると受け止めているところです。

○早坂氏

情報共有そのものが議論になるというよりは、情報共有を発信していく側の人を育てていくことに公民館としての社会的な意義や機能があるのではないかとこのところでお話をいただきました。

○伴氏

学校の先生方は研修を校内でたくさん繰り返して、いろんな学びをしていращやる。私は塩原先生が校長先生をしていらした大町市立美麻小学校の先生方の授業づくりの学びに、地域の人達、学校運営協議会の委員の皆さんも一緒に授業づくりを学ばせてもらうというスタイルがとても憧れでした。一昨年辺りから先生方が日常的に学んでいるところに保護者やボランティアの皆さんにも声がけをして、例えばカジュアルなことと言えば、プールの授業の前に行っている救命救急法と一緒に参加して学んだり、あるいは早坂先生のように最先端の未来の教育とはどういうことが起こるのか、学びの場を先生方と地域住民、それから保護者の皆さんにも参加してもらってアカデミックに学ぶ機会をたくさん設けていくことで、お互いの理解に繋がっていく。あとはハラスメントの研修もしました。ボランティアの皆さんもハラスメントの知識をきちんと持って

いた方がいいなど。ジェネレーションもかなり違うので、そのような勉強をしていく中で、先生方は日常的にこんなにたくさん学んでいるということを保護者の皆さんや地域住民が知ることによって繋がりました。今年度からは先生方の授業づくりの学びに講師をお招きするのに、まちづくり協議会でその講師の謝金を準備してくださるところまで一歩前進することができました。大人の中で大人同士が連携して共に学び合っている、それが他者理解に繋がって親和性を持ってそれを行うことで、その姿を子ども達が見ることで、安心してこの地域で、この学校で学んでいいだと子ども達が感じてくれることに繋がっていけばいいなと思っています。そのような幸せな学校、ウェルビーイングな学校になっていけばいいなと願っています。

#### ○早坂氏

教員が学んでいる場に地域の人も参加する、そこで招く講師をまちづくり協議会がお金を出すと、そのような関係性にまで今、発展しているという、この発展性にとっても興味があります。誰しもその連携協働のスペシャリストで最初からいたわけではなく、ゆっくりと地域も学校も歩み寄るように、どんどんと連携・協働の絆が深まっていくという熟度というか練度、階段が上がっていくようなプロセスが地域にも学校にもあるのだろうなとぼんやりと思っていたところで、イメージに輪郭を与えてもらったと思います。

ここまで基本的には皆さんには自由に多様なご意見をいただいているところですが、全5回である程度の見通しを持つということ考えた際に、4回目では更に具体的な一歩を踏む必要があり、5回目はまとめであると考え、この3回から4回にかけて移行するプロセスがとても大事だろうなと感じているところです。

皆さんに一つ情報共有をさせていただき、引き続きご意見をいただきたいのでお願いします。

学校運営参画とは何が難しいのだろうというところから、第3回の議論がスタートしています。いくつかのポイントとしては情報共有がうまくできないというところの難しさと、情報共有そのものがコストへ負担感になるという議論と、それが今深まって私たちは情報、確かに難しいところがあるなと思いましたが、一緒にやっていくこともできそうだという希望を塩原さんや伴さんからのお話から伺っていたところでした。このようなものが今まで学問的にどのように考えられてきたのかというと、『参加のはしご論』という理論的な枠組みで考えられてきています。

『参加のはしご論』というのは、要はお客さんだった人間が誰かから指示を受けたり、説明を受けてちょっとやってみようかなと重い腰が上がって何かの活動に参加しているというようなのが第一ステップにあるとすると、そういう人がどういうプロセスを経て自分の頭で考えて自分で学校と協議したり自分で活動を作っていくようなコーディネーター的な役割になっていくのか、その市民としての熟度、練度のようなものを計る時の理論的枠組、発達段階論のようなものがあります。歴史的には結構古く、1969年にシェリー・アーンスタインという社会学者が作ったものが原型とされています。階段が8段くらいあって、一番上にはシティズンコントロールと書かれていると思いますが、単なる地域市民を超えて、市民として自らの頭で考えて価値判断をして周りを説得したり、周りに情報伝達をすることで仲間を増やして、活動をどんどん面白くしていく一

番上のプロセスがあって、その第7段階では行政の側から市民への権限移譲が必要で、これまで行政が全て法律に則ってやっていたことの一部の法的権限を市民に与えて、フリーハンドでやってみてくださいというように権限を渡してしまう、このような『はしご論』があります。この左側のアーンスタインのはしご論を教育に結び付けて考え直したのがハートという人で、この人の『はしご論』が多分、コミュニティスクールを議論する上で非常に示唆的だと私は思っています。時間の都合で、一個一個の『はしご論』の説明はできませんが、大きく分けると右側に「Degrees of Participation」参加の度合いと書いてあって、その下3つが「Non-participation」参加してないよ・参加も出来ていないよというレベル。このハートの参加論の面白さは何かということ、教師が作る授業に子どもをいかに主体的に参加させていくかの『はしご論』なんですね。一番下はただ言うことを聞かせて知識を伝達しているだけの授業の段階です。それが、だんだんと子どもが言われたから参加するというレベルになって、どのような授業をやったらいいかということについて「Consulted」と書いてありますが相談しながら一緒に考えていくプロセスが5段階ぐらいまでになります。しかし、ここまではまだ教師主体の授業づくりです。例えば、学校と地域の関係性も支援に留まっているのは第5段階です。要は学校が「こういうことをしたいんだ」と言って、それについて相談を受けた地域住民が、「だったら俺、こういうことが出来るよ」と言うように学校の依頼を受けて動き出すのが第5段階です。だとすると、支援から連携協働へというような言い方をよくしますが、『はしご論』でいうと支援に至っている段階で、もう5段階ぐらいまで来ているわけです。ちなみにここまでは信州型コミュニティスクールだろうが、国のコミュニティ・スクールだろうが、どちらでも辿り着けます。問題はここから上です。ここから上に上がっていく時に、要は市民に、地域住民に、より主体性を持って、今の言葉でいうとエージェンシーを持って自分事として物事を捉えてもらうレベルが6段階目、7段階目、8段階目まであって、一番上まで行くと、先程の左側のアーンスタインのシティズンコントロールと同じレベル。つまり自分の頭で考えて学校と膝を突き合わせて、「教育ってこうすべきだよ、先生」と言うように地域の人がものを言い始めているのが第8段階です。この6・7・8に行っている学校は、全国にいくつか見られますし、長野県で言うと先程お名前が出ましたが大町市の学校はまさにそうだと思います。美麻小中学校はまさに地域住民の皆さんと共に一緒に授業を作って、カリキュラムも教育課程の編成のレベルで地域の人たちの声が通るようになっています。これはどこかの段階で、おそらく国型に変えて当事者に法的な権限を与えないと登れないレベルというようなものがあると私は思っています。ここまで上っていくと何が起きるかということ、アーンスタインの方でもハートの方でもどちらでもよいのですが、上の段階まで行くと本当に負担感が嘘のように消えていきます。何故なら、その人たちはやらされていないから。自分の頭で考えて、自分の頭で、言葉で喋っていて、それが世の中を変えるかもしれないという有用感を感じているのです。これがその人のウェルビーイングを高めるだろうと。7段階、8段階目まで上ってきた人たちは非常に高いウェルビーイングを持って生きていることがいろいろな調査から分かっています。

まとめますと、私たちは、学校の先生達もそうだし、校長でもそうだし、地域の住民でもそうだし、行政の人間でもそうですが、あらゆる立場でこの階段を上っていかないといけないのです。学校の先生も言われたからやっているというレベルが最初はどうしたってあると思います、若い頃に。だけれど、そのうちに自分の頭で考えて、自分なりの言葉で授業をやるようになってきます。そうなってくると、当然個人の能力の限界にぶち当たって、そこから先は人と協力しないと乗り越えられない何かを皆さん協力しながら乗り越えていったりするわけですね。学校の先生もこの階段を上ります。地域の皆さんも上ります。行政の人も上ります。あらゆる人がこの階段をみんなでゆっくり上って行って、全員で練度を高めていくという時の理論的な枠組みとして非常に参考になるなと私は思っています。先程の塩原さんのお言葉をもう一度お借りすると、この階段を先に上るのは誰なのかという問題なのですが、やはり先に上るのは学校なんだというのが塩原さんのお考えだったかと思います。まずは学校が変わる。学校が学びの再定義をして、教員の専門性の再定義をして今までとは違う形で上に上がっていく、自分の頭で考えていく。学習指導要領に書いてあるからではなくて、教育委員会に言われているからやるではなくて、法的に義務化されているからやらなければならないではなくて、目の前の子どもたちを見て、その子どもたちのウェルビーイングを達成するために自分たちは何が出来るだろうと言って階段を上っていくこのプロセスがとても大事だろうと思っています。

これをなんとかコミュニティスクールの発達段階論のようなものに当てはめて考えることが出来なかなとこの3年間ほど本腰を入れて研究していますが、つまり学校の熟度も地域の熟度もそれぞれ違う中で、うまくそこを組み合わせながら一緒に階段を上っていく時に、今、この地域、この学校は階段で言えば何段目なのか？というものが見えてきたらその学校への伴走的な支援というのを、例えば教育委員会はやりやすいかもしれません。あるいは市民の熟度か非常に高い地域で、新しく移動してきた学校の先生が必ずしも地域連携や協働に熱い思いを持っていなかった方の場合、地域の方の方が上の階段にいるというようなこともあり得るわけです。その場合は学校の先生方にも上がってきていただかなければいけない。つまり、コミュニティスクールの議論の難しさは実に多様な当事者の、多様な考えが一つの場に混ざり合うということ、要は可視化の問題だと思うのですが、今、私たちはどうなっているのか、何をして、どこにいるのか、ここから先どこに向かっていけばいいのか、というのが本当にまちまちで分からない。だけれど、どの学校にも、どの地域にも大まかにこの『はしご論』で見たときにこの辺りの段階にいるよねということが分かれば、きっと適切な個別の支援が教育委員会や地域の方から学校に対してなされることもあり得たりするのかなと思ったりします。伴さんの考えを今の私の理解の枠組みに抑えると、こんな枠組みがあったら面白いのではないかというように考えたところです。

この辺りを4回目、つまりコミュニティスクールを支援していく時に、信州型ではここまで行けると、でもここから先は国型に変えていかなければ行けないというレベルが、もし明確に理論的にきちんと言語化することができれば、より全体として国型に進めていきたいと思いますという議論になるでしょうし、結局信州型で全部の階段を上れるのであれば信州型でいいという話にやっぱ

りなると思います。私はそうならないと思っていますが、どこかの段階で必ず法的な権限が当事者に与えられないと当事者化していかないと考えています。そこについて第4回は中心的に議論していきたいと考えていることを予告した上で、さらに皆さんからの自由な発言をいただき第4回に繋げていきたいと思っています。

○城村氏

先程、早坂さんが言ったはしごでいくと、多分私も7段目、8段目にいると思っています。ウェルビーイングの塊みたいな人間です。今、高校で講師をさせていただいていますけども、いわゆる権限も任せていただいていますし、もっと言えば先生方が自由に表現してくださいとお願いしているところに、喜びや熱量もあるかなと思っています。早坂さんのおっしゃったことは自分の体験としてもすごく良く理解できる場所でした。私自身、この検討会に入っていつも反省することがあります。それは現場の先生方に対して無用なプレッシャーをかけてはいけないなど。自分の立場で言わなければいけないこともあるだろう、光を照らさなければいけないというところで、ちょっとせめぎ合っているのですが、結論とするとやはり地域ごと、学校ごとの背景や歴史が違いますので、そのスピード感や濃淡はあってもいいのかなと思っています。はしごの5段目、6段目、7段目に行っているところもあれば、そうでないところもあるでしょうし。そうではないところが、取組が遅いと批判されたりするのは、余計先生方を苦しめるのかなと思いますので、その辺りはそれぞれの地域の濃淡、スピード感があってもいいのかなと思っています。コミュニティスクールについてはそれぞれの歩み、取組があってもいいのかなと思っています。

ただ、先程から話が出ていますが、まず地域の皆さんと夢を語る場があってもいいのかなと思います。難しいことではなくて、こんな学校、私たちの卒業した時こんな学校だった、楽しかったでもいいですし、あるいは今の現状を見てこんな学校だといいなでもいいですし。

課題解決型ではなくて、夢共有型というか…そのような場があってもいいのかなと思います。どうしても教育課題だらけで、地域の方から言われると先生方も心がキュっとするだろうなとも思います。もっとフラットに、ふわっとした優しい感じで夢を語れて、そしてまたそれぞれの学校の取組のスピード感がしっかり守られていくというか、そのような中で進められればいいのかなというのを個人的に思っていたところです。

○河西氏

無理はしないとか、これまでにあるシステムを利用してと言う、ちょっと抽象的な言い方だったため、もう少し簡単に説明します。具体的に地域連携は総合的な学習の時間でやるという形はあるのですが、前にお話した学校の役割と地域の役割というように考えた時に、学校の役割というのは子どもたちの気持ちをつくることである。お手伝いではなくて、自分の課題を持ってやろうという気にさせる。地域の役割というのは、地域はこういうことをしなくて君たちの力が必要だということを訴えてもらって活躍する場を与えてもらう。このような役割分担をきちんとすると、例えば、地域では普通にやっているお祭りだとか、防災訓練だとか、地域の行事そのものが

学校としては地域連携のための教育の場にすぐに早変わりする。学校としても普通の授業と別の時間を設けて地域との連携を考えなければいけないのではなくて、総合的な学習の時間だとか特別活動の時間だとか、あるいは教科でも利用できる授業の時間を使って子どもたちの気持ちをつくる事が出来る。そうすると、これまであったシステムをそのまま活用するだけで、地域連携は回っていきます。地域連携が回っていくためのポイントを考えるのは必要で、私が思うのは必要感を重ねるといこと、そういったものさえ学校と地域が共有できれば、新しいものを作らなくても良いということが言いたかったのです。堀田先生がおっしゃっていたコミュニティスクールの取組がうまく回ると苦労しなくても伝わっていくというのは全くその通りだと思います。発信などということをやらずとも、地域の人たちは子ども達の姿を見るので、それだけで地域の人たちは「学校は子どもたちが地域と関わることを大事にしている」と即理解してくれるため、説明する必要がなくなっていくことは間違いないと思います。

早坂先生の階段を示していただいた説明を聞いている時に、目指すべきはみんな楽になる、すなわちお互いに主体的にものを考え合って動き出す段階だ、私が言っている必要感を重ねるといことは正にそれを手っ取り早く引き出すための方策なのです。ただ、この間、教育関係者にこの話をしたところ非常に懐疑的な、嫌な顔をされて、地域の必要感を優先するのか、教師や学校が動くのは子どもたちの必要感でなければダメでしょう、あなたは何を言っているかという感じで全く賛同してもらえなかったのです。先程、塩原先生の質問に私が答えたように、教師が変わるのはやはり教師の思考が変わることだと思のです。与える人間ではなく、支える人間になる。先程の話では、自分が出来ることを伝えなければ自分に出来ないことを自覚して、自分が出来ないことを出来る人間に繋げる、単純に言うともそういうことが自分の役割分担だったと考えなければならない。私が言ったような地域の人を無視して何かものを考えている子どもではなく、地域の必要感を理解した上でそれを自分事として捉えられる思考回路を持った人間を育てることが学校の役割なのだ、というぐらいの感じで先生たちが考えられるようになることこそが重要だと。これは前にも話しましたが、少なくとも3～4年私が言い続けていても未だに抵抗感が非常に強くて、これを何とか学術的に補強していただけないかなと早坂先生の話聞きながら思いました。必要感を重ねるといことは、子ども達の必要感を無視することではなく、子ども達は地域の言いなりになるということではないということ先生たちが理解できるような根拠を学術的に示してもらえたら嬉しいなとお話を聞いていて思いました。言いなりになることではないというのは本当にやってみると、堀田先生もよく分かると思いますが地域のために一生懸命にやっている子ども達を、地域の人達が言いなりにしようなどと思う訳がない。嬉しくて、嬉しくて仕方がないというのが私の言いたいところです。

○塩原氏

河西先生からとても良い話を聞けたと思っています。河西先生の発言の中にあつたことは、先生方の思考を変える。その先生方の思考を変えるのが校長先生の仕事です。言葉を変えれば校長先生のビジョンが先生方の思考を変えていくということになると思います。早坂先生のお話の中

に、はしがかけの階段がありました。1から8まで着実に1段1段上がっていくようにすれば良いと思いますが、1から3くらいまでのところはやはり校長先生が頑張らないといけないと思います。河西先生は発言の中で総合的な学習をポイントとして出してきましたけれど、戦略的に考えれば、まずは圧倒的に時間数の多い教科学習で、主体的・対話的に深い学びの実現を目指していけることが望ましい。そこから総合的な学習で探究的な学びをするのがいいだろう。道筋を作ってあげるのが校長先生のお仕事かなと思います。

早坂先生がおっしゃるとおり、信州型でも国型でもコミュニティスクールはどちらでもいい。子どもが幸せになっていけばいい、それから地域づくりが活性化すればいい、私もそのように思っています。ですから、どちらにしても欠かすことができないのは、やはり地域と共にある学校を目指そうとするその学校づくりの起点になるのが校長先生であり、先生方だという自覚を持っていただくと、事は案外簡単に進んでいくのではないかな。その学校の姿が変わって、その中で子どもが変われば、地域の人達は自ずと学校づくりに参加するようになってきます。まず、学校が変わって、先生が変わって、子どもが変わったそのことをきちんと地域の人を感じられるようにしていくことが大事かなと思います。校長先生、頑張ってくださいたいです。

○伴氏

私も塩原先生がおっしゃる通りだと思います。校長先生のビジョンは本当に学校づくりで何よりも大事なことです。はしごの上に上がっていく先がどこにあるのかということもきちんと校長先生が指し示してくださらないと階段など怖くて上れません。きちんと伝えてくださるだけで地域との関係がうまくいっていけば地域はその校長先生のビジョンを応援します。ビジョンを持っていると言うけれど、その伝え方も手を変え品を変えてやって欲しい。分かりやすい言葉で。地域の人にも保護者にも分かりやすい言葉で校長先生のビジョンを正門に張り出してもらってもいい、窓ガラスに張り出してもらってもいい。そうやって伝える努力をしてくだされば、地域はそれから保護者の皆さんも、心ある保護者の皆さんは絶対応援団になってくれると思っています。校長先生、頑張ってください。

○早坂氏

共有の仕方をどうしたら良いのかというのは本日の議論でポイントだったかと思いますが、城村さんからはそれぞれの歩みの中で課題解決型というよりは夢共有型の情報共有の場があってもいいのではないかと。この地域でどうしていきたい、子どもをどんなふうにしたい、みんなは何が出来るかと夢を語り合うような場にできれば、それはもうまたとない情報共有の場になるだろうと。

また、河西さんからはその歯車が噛み合うということをより具体化いただいて、目指すべきところはどこなのかというと、みんなが楽になる場所があるはずだと。それは全員が主体性を持ったところではないかというご発言がありましたよね。なるほどと。負担感を減らしていく段階で言うと、階段で言うと結構上の方には幸せが待っているかもしれないという予感がすごくしました。また、塩原さんの話に重ねながら、そういった形で学校を変えていってみんなが楽な方向に

まで上っていく、それはやっぱり校長のビジョンが大事だと。それを総合だけではなく教科学習にも発展させていったらいいのではないかとお話をいただきました。伴さんにはこれに更に重ねるように校長先生にエールをいただいたところです。みんなが楽になっていく場所というのが地域連携の先にあるとして、それをまだ感じられない、どうしても抵抗感、不安感が先に出してしまう学校の先生や地域や保護者の方がいる時に、やはり校長先生がまず旗を振ってビジョンを示していくと言うことが大事になるだろうし、そういった場合はできるだけ夢を語り合うような暖かい場であつたらいいのかもしれないなと思いました。要は子どものためというより、自分たちのためでもあるはずなのです。全員が市民の階段を上って行って、全員が子どものために何かをやりつつ自分が成長していつているはずなので。子どものためであり、大人のためであり、地域のためであり、学校のためであり、みんなが幸せになるようなイメージというのが、理論的に何かうまいこと形に出来ないかなと思って用意した資料を一つ共有させていただきたいと思いません。

ウェルビーイングについてですが、身体的、精神的、社会的に良い状態にあること、要は幸せだなと思えている状態を私たちはウェルビーイングと呼んでいます。これについては、長野県の第四次教育振興基本計画の柱になっている概念でもあり、文科省の作っている第四次教育基本振興計画の柱にもなっていて、さらに言えばOECDが作っている2030年に向けて私たちはどういう教育をやっていかなければならないのかという教育のコンパスという議論がありますが、子ども一人一人が自分のコンパスを持って、自分の信じている道を決然と前に進んでいけるようになるにはどういう教育をしなければいけないのか、ここにもウェルビーイングが出てきます。2010年初頭ぐらいから世界でウェルビーイングの大事さが語られるようになって、それを文科省が、そして各都道府県の教育委員会が教育振興基本計画にまで落とし込むようになったのは非常に大きな転換を感じるなと思うのですが、長野県が様々な形でこのウェルビーイングを高めていく、子どももそうだし、保護者もそうだし、地域の人もそうだし、学校の先生だってウェルビーイングを高めていくのだと言う号令を上げている時に、そもそもどうしたらウェルビーイングが高まるのかという議論があまり触れられないままにウェルビーイングの大事さが語られている、そんな気もしたりします。ウェルビーイングについては、実はかなり古典的な理論に戻って、しかもそれが近年の研究でより確かだということが確認されている自己決定理論という考え方があります。私たちが幸せを感じ時というのは、人間であればこの三つの心理的ニーズを満たしていかなければいけないのだというのが最初に出てきた1977年書籍化された段階では仮説だったのですが、その後の様々な実証実験であるとか、理論的な研究であるとか、様々な観点からこの三つはやはり人種を超えて、時代を超えて、文化を超えて、歴史を超えて、私たち人間が幸せを感じる時には外せない三つだということが確認されている自己決定理論というのがあります。この二人の心理学者によって様々な論文や書籍が出ていて、まだこの研究者は現役で、次々に新しいウェルビーイングについての研究、今は幸福学といった形で派生した学問も生まれるぐらいの自己決

定理論はなかなか面白いものを展開していると思うのですが、私たち人間は何を、どこが満たされれば幸せを感じるのかということについてこの自己決定理論もこの三つを上げています。

一つは繋がりで、人との繋がりで、浅い関係性だけの繋がりも大事だと言われていて、挨拶が出来る人がいるというような繋がりにほしごがあって、最終的には絶対的な安心信頼を得た人に何かあった時には助けを求められるし、その人に何かあったら全てを捨てても駆けつけるぞという繋がりがあって、もう一つは有用感。自分がやることで世の中を変えるかもしれない、今ある世界をちょっとだけ良くできるかもしれない、私には出来るかもしれないという感覚です。三つ目は自律性。これは人から言われたからやるのではなく、努力義務化されているからやらなければいけないのではなく、これは子どもたちのために、そして自分のために、地域のためにも、みんなのためにやらない選択肢などないのだと。己の頭で考えて自分で行為を選択して決然とその道を進んでいくという自律性。この三つが重なり合う形で一人の人間の中に満たされていくとその人は高いウェルビーイングを感じると言うことが、今の心理学では定説になっています。

これらの理論的背景を奥の方に持ちながら今のコミュニティスクールの議論があるというように理解をしているのですが、要は学校の先生がウェルビーイングを持つためにはどうしたらいいか。学校の先生こそ繋がらなければいけないし、学校の先生こそ有用感を持たなければいけないのです。日々やらなければいけないことをやっているだけではなくて、この授業が子ども達を今作っているんだと、子ども達が成長することが未来を作っているんだと言う、この確かではないけれどもそんなに違いないと思えるような確かさみたいなものを日々の教育で感じる事が出来れば二つ目もクリアです。三つ目の自律性、今の日本の学校だけではなく、社会に欠けているものだと私は思っているのですが、言われたからやる感というか、ルールが引いてあるからそこを走るということではなく、ルールそのものを引き直すということですよ、自律性というのは。こっちは大事だけど、こっちはなんじゃないかと自分の嗅覚が訴えている方向に全力でコミットしていける、コントロールされているのではなくて自分の人生を自分でハンドルしているという感覚。私のコミュニティスクールの実践で階段を上っている人達はこの三つをすごく持っていらっしゃると思うと毎回すごくびっくりします。どこまでも繋がりが広いし、深いし、自分がやっていることは一歩一歩小さなことかもしれないけれど確実にこの地域をこの学校を子ども達にとっての環境を、更に戻せば自分の人生を良くしているという有用感を感じていて、更に言われたからやっている訳ではないという、自分でやりたいからやっているというこの三つが揃ってウェルビーイングに満たされる時、私たち人間は、恐らくやることの負担感を感じないのではないのかなという気がします。このウェルビーイングが今の教育振興基本計画の柱になっていて、外せないキーワードでもあるし、今のOECDつまり世界の教育がこっちの方向を大事だと言うようにコンパスを示している中で、いかに私たちがウェルビーイングを保つか、大人がいかに幸せになるか、それと子どもをいかに幸せにするか、このウェルビーイングの議論も欠かせないだろうということを皆さんのご意見をいただきながらとても強く感じた次第です。

次回以降、この『はしご論』でこういった形で地域や学校に伴走していけるのかということや、なかなか階段を上っていけない時にどんなことがあったら2段目から3段目、3段目から4段目に上がっていけるのか、そして上まで行った人が今どんな形でウェルビーイングを実感しているのか、校長先生であれば、多分子どもの幸せももちろん願っていると思うのですが、学校職員の幸せをすごく願っていると思うのです。ご縁があって一緒に働いているこの先生達の幸せをどうやったら守れるのか、すごく考えていらっしゃるのだと思うので、教育委員会はこの校長先生達をどうしたら幸せにできるのかと別の次元で違う問いもあるのだと思います。私達は誰を幸せにできるのか、そのために何をしたらいいのかというウェルビーイングが私たちの議論のこれまでを支えてきてくれたような気がします。

残り4回目、5回目と回数が少ないですが、このウェルビーイングあるいは人々の幸せ、この辺りを少し中心に据えながら今後議論が展開できるとな面白いことになるのかなと感じた次第です。

○堀田氏

今の三つの繋がり、有用感などまさにその通りだと思います。授業を充実させてるためには、やはり必要感やワクワク感はとても必要だと思います。それが起こってくると、子どもたちは自主的に動き出す、それが次の探究に繋がる。その探究をしていくとやはり繋がりが必要になってくるので、人との繋がりのや物との繋がり、地域とも繋がってくる。それがうまく回るとコミュニティスクールの地域との繋がりも自然に繋がってくるということで、今日の話が繋がってくると思っています。これをうまくさせていけば、どこの地域でもコミュニティスクールをうまくスタートしていけるのではないかと自分は思っているのです、それを第4回でもう少し詰められたら有り難いなと思います。

○傳田氏

学校の先生方、また教育委員会の皆さんや行政の皆さんで、必要感や有用感を今回語っていただいているなど。私としては産業界や保護者ということで、私たちは六方よしの次世代育成ということで次世代育成を核にすると、その六方というのは学校・子ども・家庭・産・学・官とそれぞれにとっても良い効果があるということを仮設と実践で12年間位やってきて、先程の段階の議論もとてもじっくりくる形なので、今の実感としてはとてもいいものだと思います。次回皆さんと一緒により多くの人に伝わる形になるように詰められたらいいと思います。意識的な部分と具体的な仕組を明確に分けながら、意識だけでは進めない部分も多くあるので、その具体的な仕組や体制づくりも議論していきたいなと思っています。

○早坂氏

皆さん、熱心なご議論本当にありがとうございました。いろいろ見えた思いでございます。上らなければいけないところは、今はまだまだ高いですけども、一步一步着実に頂上に向かって協働的に進めているなという実感を持たせていただいております。皆さんのおかげでございます。

○市村課長

本日もそれぞれのお立場から色々な貴重なご意見、本当に素晴らしいご意見をお伺いできたな  
と思っております。事務局で少し整理をさせていただきますして次回の検討会へ繋げてまいりたい  
と考えております。皆様ありがとうございました。